

村岡典嗣年譜——東北帝國大學文化史學第一講座着任から
日本思想史學會成立まで（下）

池上隆史

【凡例】

- ・『日本思想史研究』（岡書院・岩波書店）…卷数を漢数字で、『一』『續』『増訂』『二』『三』『四』と略記する。
- ・『村岡典嗣著作集』（創文社）…卷数をローマ数字で、『I』『II』と略記する。
- ・『日本思想史學會會報』（日本思想史學會）…『會報』第〇號と略記する。
- ・『芭蕉誹諧研究』（岩波書店）他…『芭』『續芭』『續續芭』『新續芭』と略記する。
- ・『波多野精一全集』（岩波書店）…書名・卷数を『波・一』と略記する。
- ・『阿部次郎全集』（角川書店）…書名・卷数を『阿・一』と略記する。
- ・『新村出全集』（岩波書店）…書名・卷数を『新・一』と略記する。
- ・各年度の講義題目と、当該年度の補足事項は、「※」に記す。
- ・講義題目は、原則的に、東北帝大以外で行われた講義のみ大学名を記した。

●一九三二（昭和七）年 四十八歳

一月二十四日 第三回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第三號、改造社 1934.5.1）

二月 『神道研究資料目録 私藏書』

二十八日 第四回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第四號、改造社・1934.6.1）

三月 山本信道（文學士）、學士試験合格。卒業論文「貝原益軒の研究」。

この後、山本は東北帝國大學法文學部副手（1934.3.12）・宮城女學校教員を経て、陸軍豫科士官學校教授に就任するが、敗戦によつて失職。同年から寶文館に就職。編集員を務めた。

又、本月、三浦なをが大學院を退学、翌月から東京女子大學講師。

十二日 「枕草子と徒然草」（『續』）脱稿。

二十七日 第五回西鶴俳諧研究會（『俳句研究』第一卷第七號、改造社・1934.8.1）

四月 日本思想史金曜讀書會（於村岡典嗣宅。夜。）

前年度の『正法眼藏』の残りを読み終え、「次で嘆異抄を用ゐ、第十章まで二回繰返して昭和九年三月四日を以て一先完了した（『會内消息』／『會報』第一號、30頁）。

二日 東京文理科大學史學科水戸東北地方研究旅行（『學内消息』／『史潮』第二年第二號、大塚史學會・1932.6.29）

「本學國史學科學生は、中山（久四郎）・松本（彦次郎）兩教授指導の下に、昭和七年四月一日より四月九日迄、九日間の豫定で水戸及び東北地方に史學研究旅行を行つた」。

「四月二日 東北帝國大學——青葉城址——大崎八幡神社——養賢堂址(仙臺泊)」。東北帝國大學では、所藏稀覯書の一部を特に一行の見學に便する爲めに、豫め一室に陳列展観に供せられた。附屬圖書館長村岡典嗣教授の懇切なる説明のもとに、閲覽し得た典籍を左に略記する。

「○類聚國史第廿五 一卷」「○假名東鑑 五十一冊」「○愚管抄(寫本) 七冊 奥書は史籍集覽本に同じい。」「○日本紀纂略 慶長寫本 三冊」「○紅毛天地 二圖覽說 北島見信著 一冊」「○聖帝考 伴信友稿 一冊」「○新訂萬國全圖 高橋景保作製 一舖 これは景保がシーボルトに贈つたもの。」「○烈公書簡(五冊の中) 一冊」「○奥羽觀跡聞老志 佐久間洞藏自筆稿本 一冊」「○坪碑考証 藤原知明著 一冊」「○多賀碑文雙鈎 大槻平泉騰寫一冊」「○多賀城碑釋文 林子平著 一冊」「○三國通覽圖說 林子平著 一冊」「○三國通覽圖說 林子平著 猪飼敏所手澤本 一冊 五枚。」「○伊達家記録 綱村公書入 四冊。」「○アダムス、オレアリウスの東方旅行記(獨文) 一冊。」「○大清國に於ける和蘭東印度會社の公使館(蘭文) 一冊。」「○支那の哲人孔子(羅典文) 一冊。」「○仙臺きりしたん文書 これは石母田文書の名に於て學界著名のものであるが、すべて百二十通の多數にのぼり、水澤に於ける同種の文書と共に、奥羽吉利支丹關係史料として最も貴重すべき文書である。しかし今回はその代表的のもの七通が選ばれて展覧された。

- 一、そてろ宛石母田宗頼書狀案(元和九年七月廿四日)
 - 二、石母田宗頼宛片倉小十郎等書狀(元和九年霜月三日)
 - 三、中島監物宛石母田宗頼書狀案(元和九年十月十四日)
 - 四、きりしたん御せんさく覺(元和十年正月二日)
 - 五、中島監物等宛石母田宗頼書狀案(寛永十五年卯月十九日)
 - 六、寛永十六年老中達し寫
 - 七、三月五日御法度に罷度候覺(寛永十七年)
- 右の中の一は元和九年當地に於ける吉利支丹壓迫の開始を知らせた書狀案、二は藩士片倉より壓迫の實施を命じた書狀、何れも

此の地方吉利支丹の最初の迫害に關する貴重なる史料である。四はこの中に有名な寛永元年に行はれた大橋下の水牢事件等に關する敘述があり、此れ等の記事が、かの *Leon Pages* の記述を裏書するものあるは、最も注意に値する。

特別室の閲覽を終つてから、更に司書官の御案内で圖書館内を一巡した。ヴント文庫並にミュンステルベルヒ蒐集本の偉容は、こゝに記すまでもない。これ等に伍して、日獨戰爭の當時青島より入手したといふ圖書もあつた。またカンゼル(說部)タンゼル(論部)の兩部を揃へた西藏藏經は蓋しこの方面に於ける最も貴重すべき典籍であらう。しかも二萬三千部、八萬冊に上るいふ膨大なる狩野亨吉博士文庫本は、本館の最も誇りとすると、未だその整理も不充分ではあるが、多方面の藏儲中概していへば徳川時代の文學に關するものが多い様である。

十七日 第六回西鶴俳諧研究会。村岡の担当(『俳句研究』「子規特輯」/第一卷第八號、改造社・1934.9.1)。

五月二十九日 第七回西鶴俳諧研究会(『俳句研究』第一卷第八號、改造社・1934.10.1)

六月一日 内閣より、高等官二等に陞叙。

五日 「枕草子と徒然草」(佐佐木博士還曆記念會『日本文學論纂』明治書院)→『續』

六日 佐佐木信綱の還曆記念祝賀會(於華族會館)。

會では、竹柏會同人と、佐佐木の友人等によつて編まれた『日本文學論纂』と、竹柏會同人六四三人の自選歌集『光風 佐佐木信綱博士還曆記念歌集』(竹柏會出版部・1932.6.5)が贈呈された。

十五日 宮内省より、正五位に叙される。

二十日 「東洋哲學史(日本第一部)」(岩波講座『哲學』[概説])第七回配本、岩波書店)→『四』

二十六日 第八回西鶴俳諧研究会(『俳句研究』第一卷第九號、改造社・1934.11.1)

西鶴研究会は本回で終了。

三十日 重松信弘らの「國文研究雜誌」の発行に難色を示す。

「二時半より學士會で國文雜誌相談會、村岡を賛成させるに八時過までかゝりて漸く出させることに決定、／面會日の連中待つてある——矢板、橘、平出、佐藤(女)、伊坂、中島(慶)、矢本、村田、澤柳、重松、菊澤、横澤、星加、後藤、村上、一高會三人／最後に雜誌發起人居残る」(『阿・十四』631頁)

七月六日 「思想と和歌」(『短歌講座』第十一卷、改造社)

「吾人はこの問題について、二つの結論的命題を掲げて、之を説明しようと思ふ。即ち第一に、和歌は、重要な思想的資料であり得る。而してこれは殊に、古今集頃までの上代に於いて然りといふこと。第二に、和歌は思想的資料として必ずしも完全でない。不適當、不十分な性質を有する。併してこは、殊に古今集頃以後の後代に於いて然うである。しかもそれにも拘らず、この點に於いて、然るべき考慮さへ拂はるれば、和歌はやはり、必要な思想的資料、少くとも副資料たり得るといふことが、それである」(32頁)。

夏 講演「國民精神の淵源」(於大阪)

「この頃日本の思想史とかいふものが多少作られて來たが、大學に於いてさういふ講座の設けられたのは、數年前東北帝國大學で設けられたものが最初であつて、今日は九州帝國大學にもあるやうである。大學に於いてすらその様な状態である。數年前東北帝國大學で教授が集つて講義題目の相談をした時に、私が神道を講じたいと言つたら、二三笑つた人があつた。即ち、神道といふやうなものは大學で研究すべき程の價値があるかといふ風に考へられてゐたやうである。

さういふ譯であるから、これまでの弊害に鑑み、我々はお互ひに反省して、祖國のことをもう少し理解して行くことが此の際特に大事であると思ふ。これは勿論、現在焦眉の急たる思想問題に對する対策としては迂遠のやうであり、又實際さうであるかも知れないが、これは併し私は根本的のものであると信ずるのである」(4—5頁)。

八月十六日 村岡の發議で、「國文研究雜誌」の發行評議會が開かれる

が、その席で計画が頓挫する。

「昨夜の雷雨にて不眠の爲朝遅く起きる、午後舛金を受取りに來る、夜村岡の注文にて政岡屋に例の雜誌の評議員會、愈々のところにて□□□□瘞返り——□□無責任無誠意、□□は□□より誠意あれども狹隘身勝手、／歸宅十一時半、／深夜二時三階にのぼりて大なる星を見る」(同上)。

二十四日 午後星加菊澤重松山本後藤横澤來訪、雜誌一應寂滅の報告をきく、Je l'angerheit, je mehr enttäuscht.」(同上、635—636頁)

九月 村岡哲(1911—1986／宮城※典嗣長男)、東北帝國大學法文學部入学。「法文學部(中略)に入学し、法学、社会学、ドイツ文学等さまざまな学科に足を突き込み、ずいぶん放浪したあげく西洋史学科に落ちつき、大類伸に学んだ。また、「私は昭和十年ころ東北大學で西洋史学を学んでおりましたので、喜田(貞吉)先生の御講筈にも末席を汚させていただきました」(村岡哲前掲書、264頁)。

同月 嶋稔(1911—1984／和歌山)、東北帝國大學法文學部入学(聽講生)。

嶋稔は入学当初國語學を専攻し、山田孝雄のもとで学んでいたが、入学翌年に山田が辭職したため、専攻を日本思想史に変更した。

嶋の子息、嶋陸奥彦(1946—／岩手)は、現在東北大學文學部教授(文化人類学)。

稔が、生前陸奥彦に語つたのは、専ら山田の思い出ばかりであつたが、村岡の影響が官長について話すことも折々あつたという(嶋陸奥彦談)。

十日 平田篤胤九十年祭記念展覽會(於秋田市秋田縣立圖書館／十一日迄)

展覽會に、平田の大夫直枝苑三月十六日付書簡が出品。本書簡に觸発され、村岡は、篤胤の没後入門説に疑問を唱えた。この問題は、村岡に於ける篤胤像の形成に大きな影響を与えた。

「今から何年か前に、秋田で平田先生の九十年祭があつた。平田は晩年秋田へ歸りましてそこで歿して居るから、さういふ関係でお祭があつた、その時に講演に頼まれて参りましたが、恰度その時平田の遺物展覽

があつてその中に平田が自分の同郷の人のところへやつた手紙があつた。(中略) 普通の説明では享和元年に本居が亡くなつたがその當時に名前を知つたといふことになつてゐる。けれどもこの手紙によつてその説明が覆へされた譯であります。この手紙が偽物ならば問題はありませんが、どうも本當の手紙らしい。手紙の内容については詳しいことは申しあげませんが、平田盛胤さんが私と一緒に汽車の中でその手紙の眞偽を見たところがどうも本物らしい。それから歸りに色々考へたが、かりに平田がさういふ文章を書いたとすれば、享和元年から三年まで、即ち御物故の一昨年といふ年とすればこれまでの説明が動かない。大事な問題だと思つて又横手へ尋ねて行つてその寫しをもつて來てゐるがどうも間違ひがない。さうなると享和元年に平田が入門したといふことが怪しくなる。

「こゝで申しておきますが秋田の教育界から『平田篤胤と佐藤信淵』といふパンフレットが出てゐる。これは小學校の校長をしてゐた沼田(平治)といふ人と私とで、書いてありますが、その分には普通の通りに書いてあつたが、この頃出てゐるものには享和三年に平田が初めて本居の名前を知つて入門したといふことが近頃手紙で分つた、といふことが断つてある」(『本居宣長と平田篤胤との比較』／『教育研究』第四百五十九號、73～75頁・1936.10.11)。

※ 帰仙後、國學談話會の席上で、本書簡についての発表を行う。

後年、村岡は書評で、山田孝雄の『平田篤胤』(資文館・1949.12) について、「評者がこの書翰出現の當時、東北帝國大學國學談話會の席にて述べ、その後雑誌上に公にもしたる見解の、著者によりて何參照せられざりしことを、些か遺憾とする」(『讀書漫評』(その一)／『文化』第八卷第十號・1941.10.1)と、苦言を呈している。和田喜八郎について。

「秋田の教育會長をして居られる和田喜八郎君が郷土を研究されて篤胤の両親の墓をはじめて發見された。その時私も案内してもらつて行つたが一寸疑はしいところもある」(同上、89頁)。

しかし、後に村岡は、講義「國學ノ思想」(1933 秋～1944)で和田の發見を以下のように評価している。

「篤胤の」出奔の原因については、從來は繼母との折合云々がいはれたが、その事の信すべからぬ事は、昭和七年春秋田の和田八郎氏の篤胤の父母の墓碑の發見により、當時が篤胤の生母の生前であり、従つて繼母の入室以前なる事明らかになりしによつて、明らかになされた。さればこの出奔の原因は未だ明らかにしえないが、それが篤胤の生涯の、而して又學問の轉機となつた事は言ふまでもない」(『III』30頁)

十一日 平田篤胤九十年祭(於秋田縣)

「九月十一日平田大人の九十年祭を秋田縣教育會、秋田縣神職會、秋田圖書館共同主催の下に舉行した。同日午前八時より手形山奥墓前に於て龜井寛造氏齋主となり、墓前祭を行つた。主なる參列者は遺族平田盛胤氏、九十年記念祭本部より榊原中將、式部知事、平岡鑛山専門學校長、長谷部市長代理、井上前市長、和田、戸崎本會正副會長各郡市教育會代表者、村岡東北大學教授、藤丸社寺兵事課長、其他市内各中小學校長等で、齋主の嚴肅なる祭式あり、夫々玉串を奉奠して午前九時儀式了へ、更らに午前十時より千秋公園彌高神社に於て記念祭を擧げた、前記墓前祭に參列した人々の他一般市民、教育關係者の參拜もあり、ことに市内中等學校生徒、小學校兒童の參拜があつて、時ならぬ雜鬧を呈した。

此日午後二時よりは女子師範學校を會場として東北大學教授村岡典嗣氏の「進歩主義者としての平田篤胤翁」なる記念講演があり、一般市民教育並關係者の聽講多數あつた」(『平田大人九十年祭』／『秋田教育』第九十五號・1932.9.30)。

同日 講演「進歩主義者としての平田篤胤翁」(於秋田縣女子師範學校／午後二時から)

「今日平田翁の九十年祭に際して、翁の生誕地且終焉地なる當地に於て講演することは、まことに光榮とするものであるが、翁の人物、學問、思想等の一般については、諸君はすでに御承知のことと思ふので、私は

在來餘り人の述べなかつた方面について、申し上げたいと思ふ。

平田翁は申すまでもなく國學者であるが、元來この國學といふものは、學問であつて同時に主義思想である。而して往々國學に對しては、一種固陋とか、頑冥とか、保守的とかいふ屬性が聯想されがちであるが、發生の由來から考ても決してさうでなく、國學は學問としても思想としても、本質的にむしろ進歩的のものであり、國學者は一個の進歩主義であつた、中にも我平田翁はその代表者であつたと云へる。

「耶穌教教義をば、翁は實に、本教外編の別名の示す如く、本教自體の爲に、學んだのである。而して更に之を、翁の傳記に徴して見ても、かくの如き思想的成立の時代は、翁が生活上非常な困苦と戦つた時代で、さすがに「天地の神はなきかもおほすかもなし」の禍を見つゝ坐すらむ」「天道是か非か」等の神義論的疑問に悩まざるを得なかつた頃であり、かくの如き神學的思索の、いかに切實であつたかを推測するに足りる。翁は實に、耶穌教書から真劍に學んだのである。而して言ふまでもなく、耶穌教は當時禁教であり、崎人十編以下は當時禁書であつた。禁書とはいへ、當時心ある人々の間には、私かに讀まれてゐると思はれるが、篤胤翁も實に、その新知識の一人であり、殊に思想的に之を活用した思ふに最初の人と言ひ得よう。かくの如きは、翁の進歩主義者たることを最も有力に語るものであらう。翁の著書中に、蘭學的知識の少なからず見えること、翁の門下門流中に、六人部是香、大國隆正、崔峰成申等の蘭學的知識を有した人々を出したこと、いづれも決して偶然でないと思はれる。」

「今日往々にして、歐米文化崇拜の弊を説き、日本文化獨創の叫びをきくはまことに可である。しかも、歐米の文化に對して、物質的にも精神的にも已に學び盡されたとし、さらに之を拒否せむとするが如きあらば大なる誤りであり、そはまた實に、我が平田翁の精神でない。

所謂思想善導の最も根本的方法は、國民の間に、日本の文化、日本の思想について、眞の學問的理解あらしめるにあると思ふ。理解は親愛の情をうみそは眞の愛國心の礎となる。この點からしても、殊に平田翁

の如きこの地の生んだ國家的偉人を記念せむとする今日の企ては、まことに有意義である。それにつけても、遺憾に感ぜらるゝは、かの松阪に於ける本居翁の遺跡保存の如き企てが、未だこの地に見られないことである。平田博物館設立の必要の如きすでに識者の間に叫ばれてゐると聞くが、その實現の一日も早からむことこそ私の希望してやまないところである」（平田大人九十年祭記念講演要項）／同上、11頁。

三十日 「進歩主義者としての平田篤胤翁」（平田大人九十年祭記念講演要項）／『秋田教育』平田大人九十年祭記念號／第九十五號、秋田縣教育會

十月一日 浪岡具雄『天地理談』に就て（『書物評』／『書物展望』第二卷第十號、書物展望社）

「曾て同書『天地理談』の抄本を大阪の古展で見ても垂涎してゐたのであつたが、圖らずも村岡典嗣氏が同書江漢自筆本を得られた由で、之が翻刻版行の豫告を見て驚喜その出版を待つてゐた。漸く同書を手にして見ると内容が違ふ、（中略）村岡氏本には、磁石の事など所謂理談と云ふべき事項がなく、同氏謂ふが如く江漢晩年の人生觀を書きつらねたもので、而もその巻頭には『無言道人筆記』とあるのである。然らば村岡氏本は表紙題箋の示す所の『天地理談』ではなくて、實は『無言道人筆記』そのものであらうと思はれる。」

「實は本件に關し、他の機會に之を指摘して學界の注意を喚起し、教を乞ふたのであつたが、幸ひ村岡氏の肯定をも得たやうに傳承してゐる。村岡氏はその正誤の機會を作るに慎重の態度を持せられてゐると思ふが、（中略）聊か見聞する所を録して更に大方の叱正を仰ぐこととした。」九日 「司馬江漢の天理地談に就て」脱稿。

「浪岡具雄」氏は「傳聞によれば村岡氏もその誤りを認め」たらし」とか、「村岡氏の肯定を得たやうに傳承する」とか記してゐる。

最初に一言する。如何なる傳聞によられたか知らぬが、吾人は別に誤りを認めてもをらず、氏の説を肯定してもならぬ。」

「村岡本については、著者（江漢）自らが命名してゐる以上——たと

ひ別名無言道人筆記があるにしても、「天地理談」の名を否定することは無論出来ないと思ふ。

終りに吾人は、浪岡氏が題簽の誤記といふ如き、この場合決定的意義を有する認定は、實物に就かないでは公言を避けられたい(固より想像は隨意であるが)と言ふことを、敢へて希望する(31頁)。

二十九日「本の座談會 讀書週間展に因みて」に参加(於河北新報社本社樓上會議室。夜)。

〔時・十月二十九日夜／處・本社樓上會議室／人・東北帝國大學教授阿部次郎氏・同村岡典嗣氏・同小宮豐隆氏・同圖書館長田中敬氏・齋藤報恩會理事小倉博氏・東北帝國大學圖書館囑託常磐雄五郎氏・書籍商末長勇四郎氏(無一文館店主)・本社記者A・B・C〕

十一月一日「司馬江漢の天地理談に就て」(『ドルメン』十一月號(第八號)、岡書院)

同日「本の座談會 讀書週間展に因みて(1) 古本蒐集の快味! 掘出し物は『新撰陸奥風土記』— 切捨て御免の製本屋」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

二日「本の座談會 讀書週間展に因みて(2) 珍本を賣拂つた細君 掌中の玉と握つて放さぬ常磐氏 掘り出し物自慢競べ」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

三日「本の座談會 讀書週間展に因みて(3) 仙臺と東京に跨る源氏物語を繞る波瀾 七圓のロシア船が實に百圓也」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

四日「本の座談會 讀書週間展に因みて(4) 漱石の小説を小宮氏、信心で讀む 多く少年時代に讀まれる八大傳 『不如歸』『金色夜叉』『思ひ出の記』—」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

五日「本の座談會 讀書週間展に因みて(5) 藏書印のいろ／＼ 日本國內で出版される本の數一ヶ年に約二萬種—」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

六日「本の座談會 讀書週間展に因みて(6) 青年、婦人によい

本 日本ものでは正宗の『命語記』 座談會、羽黒山に登る」(『河北新報』朝刊、河北新報社)

十四日 丸善書店が、邦訳版 Guia do Peador 上巻を、イタリアのトリノで購入。

「このほど東京丸善の手に入り、此の十七日より展觀に供するといへるギヤ・ド・ペカドル(上巻)をもみてまゐり候。厚み、英本、仏本(?)よりハカさみまされるもの(これハ紙質ニもよるか)うら標紙うつくしき五七の桐のまうるをおきたる美本に候。卷末の集字、村岡氏の言といふをきくに、一頁多しといふことに候。上下少しく切斷しあるニや、英仏本よりハ、やゝ短小ニみえ候ハ、目のまよひか、或ハおぼえちがひか、若し英仏の本の長さ(寸)や幅などを寸法(メートルか又かね尺か)おとりおきに候ハ、至急御一報被下やう希上候。早速東京へしらせてやりたく候」(新村↓土井忠生・勝子宛書簡／『新・十五』452~453頁)。

邦訳版 Guia do Peador は、「我國では佚してしまつて、村岡氏の校勘複製された(古典全集第二期刊行)ものによつて其全文を窺ふの他なかつたが昭和七年丸善書店が伊國トリノから本書の上巻を回収することによつて、我國にも原本を有するにいたつたのは喜ぶべきことである。又本書の上巻一冊が、西國エスコリヤルのサン・ロレンソ文庫から土井忠生氏によつて發見されたことも特筆に價する(新村出「南蠻文學」／岩波講座「日本歴史」第十七回配本、岩波書店・1935.2.14／『新・七』28頁)。

十二月一日「平田篤胤と本居宣長」(『續』脱稿)。

二十日「神道の倫理學」(岩波講座「教育科學」第十五冊、「III 現代教育科學の主要傾向」の章／岩波書店)↓『四』

※【普通講義】「日本思想史概論」(太古・上古)
【特殊講義】「近世神道史の研究」(↓「I(神道史)』)
【演習】「古訓古事記中巻」

●一九三三(昭和八)年 四十九歳
一月五日「平田篤胤と本居宣長」(『精神科學』「日本思想研究號」)／昭和

八年第一卷、廣島文理科大学・廣島高等師範學校 精神科學會／↓『續』

二十五日 『新續芭蕉誹諧研究』(岩波書店)

三十一日 「午後四時學校に寄り村岡と山田さんの辭意の話をする」
『阿・十四』(620頁)。

春 京都で、中林竹洞の未刊稿本二冊を購入する。

「晝家竹洞が、また日本主義の一思想家であったことは、已に公刊された知命記(文政十二年五十三歳成)、學範(天保六年六十歳成)、心樞(弘化二年七十歳成)等によつて、知られたが、近時自分が偶然知つたものに、未刊の稿本二種がある。一つは三才圖説で、平出氏舊藏本を昨春京都で購ひ、一つは天中道で、數月前東京で求めた」(訪書と「ころどころ」)／『會報』第二號、18〜19頁・1934.12.20。

四月 日本思想史金曜讀書會(於村岡宅、夜) 前年度と同じく『嘆異抄』。

二十二日 文部省内思想問題研究會編『國民精神の淵源』(青年教育普及會)

二十五日 倉野憲司「古事記 こじき」(藤村作編『日本文學辭典』第二卷、新潮社)

「諸本」。「以上の外に、伊勢の神宮文庫所藏の四種の寫本(この中に石川總所藏の一本と、村井敬義所藏の林崎文庫本とがある)、及び村岡典嗣氏所藏の神樂岡文庫舊藏古事記二册(中卷・下卷) 又田中頼庸が校訂に用ひた卜部兼永本(中略)等は注目すべき寫本である」。

八月 講演「古事記の思想」(於仙臺國語學會・夏期講習會)

九月 京都帝國大學文學部臨時講師(日本思想史)を嘱託。

九日 山田孝雄辭職(後任、小林好日助教)。

山田の辭職後、國學談話會は自然消滅。嶋稔は、日本思想史へ專攻を變更。

山田は、九日より史學第一講座兼擔。翌年から日本學術振興會學術部第十七小委員會委員を委嘱。一九四〇年からは神宮皇學館學長兼館長に選任され、廃校(1946.3.31)直前の一九四五年まで勤めた(1945.8.17國史編修院長に転出)。

「私は今世間から日本文法の専門研究をする爲に生れた人間のやうに見られてあるやうであり、又辭書の編纂に心を専らにしなければならぬ爲に大學を辭したので、これも亦私の畢生の事業といふ事になりさうな様子である。所が實はいづれも私としては豫期しなかつたのに、かやうになつたので、いはゞ運命なのであらう」(山田孝雄「中學生に導かれて」／菊池寛編輯『文藝春秋』第十一年第十一號、文藝春秋社・1933.1.1)。

※ 村岡と山田の親交は、東北帝大の日本思想史專攻と神宮皇學館の交流といふかたちで、以後も続いている。

神宮皇學館卒業生、淺野明光は、東北帝大(1931入学)で村岡に学んだ後、母校に戻り、同館教授として神道・哲学を講じている。

この他、日本思想史專攻では、石塚一石(1940東北帝大入学)・鈴木重一(1932入学)・原田隆吉(1943入学)らが同館の出身。

同月 三浦なを、青山嶺次(東北帝國大學工學部卒業生)と結婚。

「御結婚なさいますはじめには、(中略)私(山本信道)ばかりでなく村岡先生の奥さんも心配してお話になりましたことがあります。御媒酌は村岡先生でなく竹岡勝也先生であつたと承つています。(中略)村岡先生の奥さんの御心配は御夫婦の年齢のことでした。これも他から心配することではなく、五十年以上の立派な御生活に敬服するばかりです」(山本信道「青山なをさんの憶い出」)／「追想

青山なを」慶應通信株式会社・1986.9)。

十月七日 佐佐木信綱「日本文學の文獻的研究」(『日本文學講座 第一卷 概論總説篇』改造社)

「明治時代以來、(文獻學的研究の)愈々廣汎緻密を加へ來つたことはいふまでもないが、ここに注意すべきは、江戸時代の國學に對して、文獻學といふ名稱及び觀念が、あてはめらるるにいたつたことである。文獻學といふのは、元來希臘羅馬學に淵源を發して十九世紀頃獨逸の學者によつて大成されたのであつて、文獻に即して古文明の真相を理解せんとする點で、國學と歸を一にするので、わが國學を西洋の文獻學と類比せ

しめて考へるにいたつたのである。すなはち芳賀矢一博士は、「國學史概論」や「日本文獻學」に於いて、國學を日本文獻學なる名稱のもとに呼ぶべきを説いて居る。しかして江戸時代の國學の有する排外主義、上代偏重の弊を捨て、西歐の文獻學に則つて、一層科學的な基礎をあたへようとして居る。更に村岡典嗣氏は宣長の學を、久松潜一氏は契沖の學を、それ／＼西歐の文獻學と對比しつゝ明らかにした。(村岡氏「本居宣長」、久松氏「契沖傳」)。

二十七日 「夜山田氏送別會精養軒」(『阿・十四』)

二十九日 橋靜二の三周忌(於牛込區袋町光照寺)に出席(午後二時から)。橋は、早大講師時代の村岡が参加したプロテスタント改革運動の中心人物。

法事後の橋靜二氏追慕會(於神樂坂川鐵／午後五時から。)にも参加。村岡は、「寄せ書き」にも、かつてのプロテスタントのメンバーではただひとりその名を見せ、さらに、求められて故人の墓碑銘の筆も執つたとのことである。「また、実り報いられることの少なかつた靜二の仕事を最後まで支えた令妹の五三子(一八九五—一九八七)とは、生涯年賀状の交換を忘れなかつた」(村岡哲、273頁)。

墓所は、谷中靈園(緑色区画10号3側)。村岡の墓碑銘「橋靜二墓」(横書)は、「橋氏墓」墓石の向かつて左側面に刻まれている。

十二月二十日 「日本精神について」(『續』)稿了。

※【普通講義】「日本思想史概論」(中世)

【特殊講義】「古學神道と教祖神道」(→『I(神道史)』)

【演習】「祝詞」

●一九三四(昭和九)年 五十歳

一月十日 「鼠譬喩談と平田篤胤」(『續』)稿了。

二月一日 「鼠譬喩談と平田篤胤」(『文化』第一卷第二號、東北帝國大學文科會)

同日 「日本精神文化の研究と國學の學問的精神」(『續』)稿了。↓『續』十五日 「日本精神について」(『精神科學』昭和九年第一卷、廣島文理科大學・廣島高等師範學校 精神科學會／↓『續』)

三月 淺野明光、學士試験合格。卒業論文「吉見學に於ける存在と理想の構造」。

淺野は、十二日、東北帝國大學法文學部助手(八級俸を給付／＼1936.3.10)を嘱され、引き続き村岡のもとで研究に従事した。

淺野は、一九三八年より、出身校である神宮皇學館(館長兼大學長、山田孝雄／1940～1945)の講師(1941教授)を嘱託され、神道・哲學を講じた。

一日 「日本精神文化の研究と國學の學問的精神」(『日本精神文化』第一卷第一號、河出書房／↓『續』)

四日 日本思想史金曜讀書會(『嘆異抄』)終了。

四月 九州帝國大學法文學部臨時講師(日本思想史)を嘱託される。

八日 日本思想史學會、創立。

昭和八年九月、山田教授の退職の事あり、在來の國學談話會も自然消滅を見るに至つたが、恰かも本年は日本思想史の開講以來十箇年を迎ふることゝなるので、この時を期して、日本思想史學會を設けようとの機運が熟して來た。よつて四月八日、村岡教授の宅に重松、高柳、山本、青山、淺野の諸氏が集りて創立打合せを開き、會則や會報につき協議し、本年度委員に、高柳淺野二氏を選んだ。その後二氏専ら會務に當り、會則と通知状との印刷が十八日に成つたのを俟つて之を發送し、つぎ／＼に入會の申込あり、こゝに會の成立を見るに至つた。四月八日を以て創立の日と定める。なほ通知状は村岡教授の執筆でその全文は左の如くである。

「拜啓春暖相催し候ところ益々御清榮賀し奉り候さて今般當東北帝國大學に於いて日本思想史開講後第十學年を相迎へ候を期とし同封會規の如く日本思想史學會を設立いたし候志すとぞ敢へて現下一時の機運に乗せむとするに非ずむしろ少數の同志相携へて學問の永遠の相

に於いて日本精神文化の眞義を微顯闡幽せむとするものに有之幸ひに御賛同を賜はり候は、本懐の至りに御座候仍つて此段得貴意奉り候頓首」(會内消息)／『會報』第一號、30頁)。

一九二八年五月の國文學第一講座との合同研究會が失敗に終わつてから、國文學(岡崎義惠)と日本思想史(村岡典嗣)・國語學(山田孝雄)とは、研究・発表の場をそれぞれに設ける体制が定着していた。

日本思想史専攻の独自色を出した日本思想史學會という組織の構想は、國語學の山田の辞職と、國學談話會の消滅という事態を契機にしたものといえるが、この頃、既に國文學専攻は國文學學會の經營を軌道に乗せ、本格的な學會としての運営がなされており、これらも村岡の學會構想に影響を与えたと思われる。

十日 校訂書『うひ山ふみ・鈴屋答問録』(岩波文庫)

二十八日 日本思想史學會第一回例会

「郊外向山方面に散策を行つた。参加者は村岡教授はじめ、重松、高柳、山本、島、松村、淺野の六氏」(會内消息)／『會報』第一號、30頁)。

五月一日 講演「日本精神について」(秋田縣教育會昭和九年度大會)於秋田市縣記念館)

「國民の文化的創造!これぞ今後に課されたる我等の光榮ある職責である、この點過去に於て足らざる處なる故今後國民意識の奮起すべきときである。近代までの創造は嚴密なる意味に於て外國の後塵を拜したるもの要は今後の問題である。本居宣長翁曰く「聖人儒教の教日本にはなし」と、若い日本の姿の表現である。生物學上高等動物程發達が遅い我等は若さの態度をもつて外國文化に對すべきである。謙虚な國民には發展の餘地がある。最近新聞紙に見ゆる蔣介石の言「日本に學べ」と支那は從來自負の最たる國であつた、その指導者階級にこの言がある。この自覺が普遍化するならば支那恐るべきである。我等は桃源裡に夢を食する事をいましめると共に、極端に偏し外來文化を貶すべきでない。西洋精神文化決して無價値でなくよい意味の物質文化もその根源は精神文化にある。日本をはじめ蘭學によつて外來文化に觸れた、新井白石は西洋

精神文化を貶したがそれは偏狹である。早く洋式藝術に思を凝した司馬江漢は西洋精神文化の學ぶべきを主張した、現代人の一部に西洋精神を貶す傾向あるは警戒すべきである。西洋衰ふるもその建設した精神文化は永久に輝くものである。今後の我が國民は此邊の事に思を致さなければならぬ、眞の理解に達せず芽生へに於て切除すべからず更に深い西洋文化の精神的根柢を捉へることにつとめ、理論的にも實際的にも昂奮的に貶す時は恐ろしき反動を招來する事を思はねばならぬ。茲に冷靜に批判し價値あるものを選んで撰取する態度がなければならぬ、史的に考察して日本精神は決して偏狹でない筈である(文責・野尻百助)『秋田教育』第百二十七號／15〜16頁)。

二日 大友武三郎宅(秋田縣平鹿郡八澤木村)で、「大平翁手記之寫」を閲覽。

十日 「日本思想史の研究方法について」(『續』)稿了。

二十五日 淺野明光「本居宣長の現實主義について」(日本文化研究會編纂『日本精神研究 第二輯 神道精神』、東洋書院)

「(註) 宣長と堀景山の不盡言との關係には早く村岡典嗣先生が宣長研究の不朽の名著であり、新しき研究には必ず出發點とされねばならぬ「本居宣長」に於て夙に着眼せられ、次で國學院雜誌第廿一卷第六號に於て河野省三氏(の「本居宣長と堀景山」)により稍詳細に紹介せられた」(301頁)。

三十一日 賞勳局より、勳四等瑞寶章(第七九一八六〇號)を授与される。

同日 日本思想史學會第二回例会(於法文學部學生集會所、夜)

「重松氏の「中院家と蕃山の源氏學」及び村岡教授の秋田縣八澤木村大友家訪書談あり、なほ會讀について議し、隔週(大概土曜日夜)源氏物語を各帖について研究することを決定し、九時半散會した。出席者は村岡教授はじめ、重松、糸原、高柳、山本、島、松村、平、梶井、五端、淺野の十氏」(會内消息)／『會報』第一號、30頁)。

六月一日 「日本思想史の研究方法について」(『日本精神文化』「日本精神

史研究法號』／第一卷第五號、河出書房／『續』

十日 「日本精神について（講演）」（『秋田教育』第百二十七號、秋田縣教育會）

十五日 校訂書『玉勝間 上』（岩波文庫）

十六日 日本思想史學會第一回會讀（於片平町仙鳳園樓上、夜）

「大雨にも拘らず、村岡教授以下重松、糸原、高柳、山本、島、平、松村、五端、渥美、淺野諸氏參集、桐壺について種々討究し、十時散會」（『會内消息』／同上、30頁）。

同日 日本思想史學會編輯會（二十三日にも開催。）

二十五日 日本思想史學會第二回會讀兼第三回例會（於片平町仙鳳園樓上、夕方）

七月 講演「日本文化の特質」（於文部省講習會）

一日 T・M生「西周哲學著作集 麻生義輝編」（『新刊紹介』／

『文化』第一卷第七號、東北帝國大學文科會）

「紹介者は、往年岩波辭典の一項目として西周について記した時に、參考書としては森鷗外氏の西周傳一部のみを有したことを回想して、こゝにこの信用すべき西周關係の一文獻を得たことを、學界の爲に慶賀し、編者の勞に對して、謝意を表せざるを得ない」（116頁）。

「是に於いてか、所収の論文中、「學問ハ淵源ヲ深クスルニ在ルノ論」の如きは、當時にあつては頗ぶる卓見とすべきで、もつと重きをおいて取扱はれて然るべしと思ふ」（118頁）。

七日 「日本文化史概説」（岩波講座「日本文學」、岩波書店）

二十日 『日本思想史學會會報』（日本思想史學會、創刊）

表紙には、「學びの道は天が下の大道なれば己れひとりたてらむが如く誇るべからず學ぶ人も師の教へなりとてあながちに泥むべからず 荷田春滿」の一文が掲げられる。

會報は、會員の論文と、「會員の近業」（『新刊紹介』「會内消息」會員名簿（第一號のみ）「日本思想史學會會規」（全十條）から成る。

「新刊紹介」は、書評の基本方針を次のように表明している。

「新書の紹介や批評は、嚴正を必要とする。吾人は現時往々見る同人間のそらほめが、讀者を誤ること多きを憾み、その鑿に做はざらむことを期し、そのまた、苟も書を著して天下に問ふ著者の本意に副ふ所以なることを信ずる。しかもこれ、單に評者たるが故の當然の立場に外ならず、評者はいかなる場合にも、當の書物以上のものを作つてのみ、著者に優越し得るに過ぎぬ」（97頁）。

卷末の「會員名簿」（32頁）には、二十六名の會員の氏名・所屬が、第二號（1934.12.20）には、その後加入した六名の新會員の名がある。

三十日 長野縣伊那町で講演。その折りに、進徳圖書館を訪れる。

八月 岐阜縣大野郡莊川村で、邦訳版 *Guia do Pecador* の完本が発見される。

「奥飛驒の末寺から天下の稀書發見」ギアドベカドル「完譯の原本 切支丹偈ぶ」（『讀賣新聞』・1935.1.2）。

「金澤電話」わが國切支丹史家の垂涎的であり完全な姿では殆ど絶望視されてゐた切支丹文獻中の貴重な遺物の一つ、和譯「ギアドベカドル」の完譯の原本が飛驒高山から西へ十二、三里を分け入つた邊陲の寒村、岐阜縣大野郡莊川村下瀧平の、それも畑邊ひの本派本願寺の末寺の庫裡から發見されてセンセーションをまき起してゐる。

「今度の完本は昨年八月前記の末寺の住職が偶然に古色蒼然たるマリア像と一緒に塵に塗れてゐるのを發見したのだ、どうして傳へられたかの徑路は不明である

この稀書は目下京都の本山に移されて秘かに保存されてゐることを切支丹研究者として知られる金澤市廣坂通りメソヂスト教會牧師高柳伊三郎氏が最近になつて偶然に聞込んだので、これも斯界の大家東北帝大教授村岡典嗣博士と同道近く入浴して同本山の諒解を得て根本的の調査を行ふことになつた」

現在、ダム湖の底に水没している莊川村の下瀧平には、當時光輪寺と照蓮寺の二つの寺があつた（現在は村外へ移転乃至廃寺）。

記事からは、村岡が、發見後一年以上経過した、一九三五年一

月以降、日本思想史學會會員の高柳（1898—1984）／靜岡※1930年東北帝大で、日本思想史を聴講。）から情報を得て、高柳と共に同書を収蔵した本願寺で調査を行う予定となっていたことがわかるが、村岡自身は、発見の事実をその直後から知っていたと思われる（『訪書』1931.11.11）／『會報』第二號・1934.12.20）。

一九三五年、新村出は『南蠻文學』（岩波講座『日本歴史』、岩波書店・1935.2.14／『新・七』28頁）で、「昭和九年夏飛驒の白川村あたりの山寺で発見されたよしの合綴本一冊の今尚ほ行方不明なるは惜みてもあまりある所である。」と、この一件について触れている。十七日 日本思想史學會〔第四回〕例會

「七月より夏期休暇に入り、會員の在仙者も多く歸省した爲、全月は例會及び讀書會は遂に行はなかつたが、八月十七日在仙の會員の有志者が、打連れて作並温泉に清遊を試み、例會に代へた。参加者は村岡教授を始め、重松、高柳、平、淺野の四氏。朝八時半仙臺驛發にて行き、丸長旅館に落着き、晝食を共にし、浴をとり、懇談を交へた」（『會内消息』／『會報』第二號、25頁）。

※ 丸長旅館（廃業）は、当時の作並温泉に於いて比較的安価な料金設定をしていた旅館（作並温泉岩松旅館、岩松傳四郎・宏典談）。

九月

平重道（1911—逝去／宮城）、東北帝國大學法文學部に入学。

「私が日本思想史の研究に従事するようになったのは、今は亡き恩師村岡典嗣先生の導びきである。昭和七、八年のころ、私は偶然仙台東一番丁の無一文館という古本屋で、先生の著『日本思想史研究』を購入、早速読みふけて、その深遠な学風と興味津津たる内容とに心を打たれ、このような学問を生涯の仕事としてみたいと考えたことであつた。そこで、昭和九年東北大学に入学するや、直ちに先生の門下に参じ、親しく教を受けるとともに、日常の警效に接して、学者としての人格や生活の在り方についても、深い感銘を受けたのである。以来三十年、私がともかくもこの道につながって、研究生活をつづけることができたのは、先生の学恩の賜物として忘れることはできない。」

先生は周知のとおり哲学の出身であり、国学を中心にして、日本思想史の道を開拓された。私は家父が漢学を好み、家に漢籍などもあつたので、儒学とくに神儒關係を中心に日本思想史を研究してみたいと考え、大学卒業（1937）後は、山崎闇齋の垂加神道を研究対象にえらび、これを中心に吉田・伊勢兩神道にさかのぼり、下つては国学や古学神道との關係に及ぼうとしたのである。（『序』／『吉川神道の基礎的研究』吉川弘文館・1966.3）。

同月 宮内健正（？）／愛媛、東北帝國大學法文學部に入学。

十五日 校訂書『玉勝間 下』（岩波文庫）

二十二日 日本思想史學會〔第五回〕例會（於仙鳳園。夜。）

二十八日 九州帝國大學法文學部臨時講師を嘱託され、外遊中（1934～1936）の竹岡勝也教授に代わって日本思想史を講じる。

※ 竹岡は、文部省の嘱託で、一九三四年、精神史學研究のためドイツに留学。フランス、アメリカに留を経て、一九三六年、帰国した。

戦後、竹岡は、逝去した村岡にかわつて、第二代文化史學第一講座擔任教授に就任する。

十月一日 「國文學の註釋的研究について」（『文學』第二卷第十號、岩波書店／『續』）

二日 講義「日本思想史序論」開講（於九州帝國大學法文學部）。

七日 佐賀市で、南里有鄰の遺跡を探訪する。

十一月十七日 日本思想史學會〔第三回〕會讀（於仙鳳園、夜）

三十日 文部省より、五級俸を支給される。

十二月十五日 校訂書『玉くしげ・秘本玉くしげ』（岩波文庫）

二十日 『日本思想史學會會報』第二號

※ 『普通講義』「日本近世思想史」Ⅳ（日本思想史概説）（『特殊講義』「室町時代の思想」）

【演習】「宣命」

【他大学での講義】「日本思想史概説」（九州帝大）

（東北大学大学院文学研究科博士課程後期）